実存主義とサティ理論をふまえての生徒指導
－　愛のある教育を目指して　－

平　宮　正　志

和文要約

本論文は，実存主義とサティ理論をふまえつつ，生徒指導に関する著者自身の見識や望みを，愛のある教育を目指し記したものである。

なお記載にあたっては，まず実存主義の概要を記すと同時に，カウンセリング理論の視点より実存主義を解説した。次に，生徒指導上の教師の取り組みや関わり方を「体験学習の実施」「母権的な接触」「ふれあいと自己表現活動の推進」「子どもの視点の尊重」の４点より，実存主義とサティ理論をふまえ論述した。さらには，江戸時代の禅僧良寛を，実存主義的に生き，さらにはテンダーネス・タブーに陥らなかった人物として紹介した。

そして，愛のある教育の必要性，および著者自身の考える愛を紹介して結びとした。

キーワード

体験学習，母権的，ふれあい，自己表現，子どもの視点，愛

1．はじめに

学校教育には，学校現場を中心に，その時代に応じた社会性を育むといった役割がある反面，児童生徒の持つ能力や特性に応じて，社会の中にその能力や特性に応じた領域を見出したり，さらには切り開くといった役割がある。

著者自身の感触として，現代の日本の学校教育は，最初に述べた社会性を育むといった役割に偏向し過ぎているように思われる。その最たるものが，過度に加熱した受験指導である。受験で特に強調されるのは，「知識・理解」や「技能」などの見える学力であり，「関心・意欲・態度」や「思考力・判断力・表現力」のような見えにくい学力（小野瀬，2004），さらには結晶性能力や創造性（大川，2004），感受性，人間関係形成能力などではない。ちなみに結晶性能力とは，経験の積み重ねを通して獲得された能力のことである。

「知識・理解」や「技能」などの見える学力は，主として授業や書籍などを通して培われた学力である。大学入学以前の学校現場では，受験の弊害により，主としてこの見える学力の定着に教育活動の主眼がおかれているように思われる。逆に言うならば，もう一方の見えにくい学力は，大学あるいは社会に出てから培われる学力とみなされがちなように思われる。

ここにある意味，実存主義の現代教育への導入の必要性が認められる。実存主義では，個人を社会に従わせようとする立場をとらない。逆に実存主義では，個人の体験や経験を通しての気づきを特に尊重しており，個人から社会への働きかけに価値を見出している。言葉を換えれば，個人の内なる人間性が社会を形成していくとする立場である。

（1）　キルケゴール

なお実存主義は，キルケゴールの「宗教的実存」を先駆けとしている（貫，2007，p.81）。「宗教的実存」とは，人間社会における他人や社会的価値，道徳的価値などと一切かかわることなく，神とのかかわりの中でのみ，自身の静寂の世界を達成しようとする立場のことである。さらには，ハイデガーやサルトルなどが，このキルケゴールの哲学の流れを受け継いでいる。

（2）ハイデガー

ハイデガーの哲学の特徴の一つに，存在するものすべての存在の意味を明らかに

しようとしたことがある（貫，2007，p.96）。先に述べたキルケゴールのキリスト教的な神という発想は，ハイデガーの哲学においては見出せない。ハイデガーは，〈世界内存在〉という概念のもと，存在の意味を明らかにしようとした。なお〈世界内存在〉とは，さまざまな存在するものとの関わりの中で，ものは存在しているとする概念である（正保，1990）。さらには科学技術偏重への批判（貫，2007，pp.104-105），芸術作品への着目なども，ハイデガーの哲学の特徴といえると思う。

（3）サルトル

次にサルトルであるが，本質に先立って，すでに現実に存在する個人のことを実存と述べている（「実存は本質に先立つ」）。すなわち，サルトルにとって実存とは，一人ひとりの人の在り方のことであった。これはある意味，当時のヨーロッパの人々がキリスト教的な神に把握されていたのに対して，各個人の自由や生命を尊重する人間中心主義を基盤にすえたものである。なおサルトル自身，自分の過去や現在とかかわることなく，自身の新たなあり方を自ら決定し，選択していくことを実存的決断と述べている（貫，2007，p.93）。

2．カウンセリングの理論と実存主義

カウンセリングの理論の中には，実存主義の影響を受けたものが多数ある。そこでここではまず，カウンセリング理論への実存主義の影響を，國分康孝著『カウンセリングの理論』（國分，1980）をもとに考察してみる。

（1）実存主義的カウンセリング

実存主義的カウンセリングには性格論がない。すなわち性格はいかにして作られるか，あるいは性格はいかなる構造をしているかに関しての理論体系が未熟である。にもかかわらず，現代においてはこのアプローチでなければ太刀打ちできない問題が増えている。その一つが，実存神経症である。なぜ生きるのか，その意味が

見出せないといったものである。ところで実存主義とは，哲学のことである。そしてその実存主義が，心理学やカウンセリング理論と結びついたものが，ヒューマニスティック・サイコロジーや実存主義的カウンセリングである。そのため実存主義的カウンセリングを理解するためにはまず，実存主義について理解することが不可欠になってくる。

そこで最初に，存在論，認識論，価値論の観点より実存主義について簡潔に記載する。

まず初めに存在論であるが，実存主義において存在するものは人間一人ひとりの体験である。永遠不滅な宇宙の法則や神のような存在ではない。一人ひとりの具体的な体験，体感こそが真に存在するものである。次に認識論であるが，実存主義において認識するとは体験することである。すなわち，数学，論理学などの抽象的な学問を，頭の中で理解しただけでは本当に分かったとみなさない。体験こそが本当の意味での理解である。最後に価値論であるが，自分にとって意味あることを行うことこそが実存主義においての善である。損得を超越した世界がそこにはある。他者や環境の言いなりになる必要はない。

以上，実存主義では人間一人ひとりの体験や体感に絶対の信頼を寄せている。言葉を換えれば，人間は環境や社会の奴隷ではない。自身の体感こそが最も信頼できるものであり，それに沿って生きることこそ善である。そうした哲学が，実存主義的カウンセリングの治療目標にも反映されている。ちなみに治療目標は，意識性と責任性をもって自由に生き方を選べる人間になることである。具体的な解決策があるかどうかは二義的な目標である（國分，1979，pp.30-31）。環境に適応した人間になることが治療目標ではない。そのため実存主義的カウンセリングでは，カウンセラーとクライエントの人間同士のふれあい体験（リレーション体験）が最重要視される。

（2）ゲシュタルト療法

次にゲシュタルト療法について、実存主義の視点より解説する。ゲシュタルト療

法において実存主義の影響を受けていると思われる部分は,「ボディ・ランゲージ」や「体内の感覚」の重視である。すなわち,洞察(insight)ではなく覚知(awareness)の重視である。いわゆる体での表現，すなわち声，表情，視線，体内感覚などのほうが，言葉や知的理解などよりも，その人を正直に表現しているとする人間観である。

そのような人間観のもと，ゲシュタルト療法ではゲシュタルトの再構築を目指していく。すなわち全体のバランスの取れた人間を目指す。換言するならば，嫌な時に嫌と言える人間である。逆にうれしい時に，心の底からうれしいと言える人間である。これは，先に述べた実存主義の価値論に通じる内容でもある。

(3) 自己理論

自己理論とは，ロジャーズの来談者中心カウンセリングの基礎理論のことである。自己理論では自己一致した人間を目指す。すなわち，感情と行動の一致した人間である。泣きたい時に泣け，笑いたい時に笑える人間である。実存主義の立場からいえば，自身の体感に正直な人間，裏表のない人間ともいえる。なお，ロジャーズの理論を発展させた人物の一人にジェンドリンがいるが，ジェンドリンの提唱したフォーカシングも，体感の重視という点において実存主義に通じるものがある。

(4) 交流分析

交流分析ではゲームの時間（交叉的裏面交流）を避け，ホンネとホンネの相補的交流を促している。すなわち,対決(コンフロンテーションあるいはエンカウンター)を通しての相補的交流を価値ある生き方とみなしている。いわゆる，逃げのない姿勢である。ここに，自身の体感に従って生きることを善とする実存主義の影響がうかがわれる。ただ，多くの人が行っているゲームは社会的にも容認されており（上司にへつらう部下など)，ゲームの度合いを認めている点に社会性を踏まえてのしなやかさ，いわゆる理論における柔軟性が感じとれる。

また脚本分析では，各自が潜在的に持っている人生プランを覚知し，その不合理

性を修正する。なお脚本分析とは，本当の自分の人生を生きているか，親や社会・文化から埋め込まれた人生を生きていないか確かめる作業のことである。周りの環境に左右されることなく，体感に従い生きることを善とする点において，ここにも実存主義の影響を見出すことができる。

（5）論理療法

論理療法は説得療法である。感情を変えるためには，自身が身に付けた文章記述を変えればよいとする人間観に立っている。実存主義の影響を特に，その現象学的な視点に見出すことができる。ちなみに現象学とは，受け取り方の世界のことである。すなわち人は，目で見る世界に住んでいるのではなく，その世界をどう受け止めているか，その受け止めた世界に住んでいるとする立場である。ある物事（例えば学校，校則，生きる意味など）に対して，主観の数だけ真理は存在するとする概念ともいえる。校則を例とするならば，児童生徒，教員，保護者，役人など，それぞれの立場において，校則のとらえ方が異なるということである。

なお論理療法では，実存主義を導入しつつも現象学的世界を各自の自由に任せてはいない。いわゆる能動的である。事実に基づかない，あるいは論理性に欠けるようなイラショナルビリーフについては，それを前向きに逆洗脳しようとする積極性がある。

3．教師の取り組みや関わり方

ここでは，実存主義とサティ理論をふまえて，生徒指導上の教師の取り組みや関わり方を「体験学習の実施」「母権的な接触」「ふれあいと自己表現の推進」「子どもの視点の尊重」の４点より論述する。

（1）体験学習の実施

物事をとらえるとき，人は一定の観点を必要とする。その観点が，自身の体験で

あるものが実存であり，その場合，事物世界の秩序は，われわれが実存する結果存在するものとみなされる。さらに解説するならば，〈内世界内存在〉とは，まず世界の秩序が存在しその中に人間が存在しているという見方，〈世界内存在〉とは，世界とはわれわれの意識の中に，徐々に姿を現わし，やがて確固とした客観秩序として，信憑されるに至るものだとする見方のことである（竹田，1987，pp.192-193）。

ちなみにカントは，純粋に思考し認識する自我から出発し自身の哲学体系を構築している。それに対してハイデガーは，体験というものがもつはじめての場面，すなわちごく一般的な日々の体験を原点にすえている。なお両者の共通点は，共に何らかの特定の仮説（＝超越）から出発していないという点である（竹田，1987，pp.194-195）。具体的に言うならば，精神分析における本能や自己理論における有機体，あるいは神の予言などがこれに相当する。ただ実際に，本能や有機体，あるいは神なるものが存在するかどうかは，誰にも判らないことである。

話題を，人間の発達段階に移す。ちなみに人間の発達は，受精より開始される（石﨑，2004）。すなわち神経系の発達を伴う，受精から約280日間の胎児期が，最初の発達段階である。この段階は言葉のない時期である。この視点よりとらえるならば，胎児期とは，先のカントの視点，すなわち純粋に思考し認識する自我から出発することが，困難な時期とも受け止められる。

すなわちカントの視点に立って考察ならば，純粋な思考を通して物事を認識できるのは，自我がある程度確立した操作的段階以降（7，8歳～）と考えられ，それ以前の段階での何らかの課題がアセスメントされた場合，必然的にカントの視点ではなく，体験を原点にすえたハイデガーの視点に立脚しなければならないのではないかと著者は考える。ここに，教育現場における体験学習の重要性が見出される。すなわち，言葉ではなく体験や体感を通しての教育活動である。

① 構成的グループ・エンカウンター

ちなみに，体験を重視した教育活動の一つに構成的グループ・エンカウンターがある。特に構成的グループ・エンカウンターは，幼少期における母子一体感の重要

性を指摘するサティ理論を背景にしているということもあり，参加者間のリレーション形成に重きをおいている。この点に関し國分は，サティ著『愛憎の起源』の序において，「構成的エンカウンターはエクササイズという技法で，実存主義の思想を，サティ理論を軸にして具現化するものである」（サティ，2000，p. ii）と述べると同時に，訳者あとがきにおいて「やさしさ（tenderness）・愛（love）・親愛関係（companionship）・共感性（empathic interest）などの体験が人を癒すとサティは力説している」（サティ，2000，p.294）とも記している。

② 詩作活用エクササイズ

なお著者自身，「やさしさ」をテーマとしての詩作活用エクササイズ（平宮，2005）の実践研究を行っているが，このエクササイズを支える理論のとしても，サティ理論や実存主義の影響を受けたゲシュタルト療法をあげることができる。

概説するならば，各人がやさしさを詩として表現する場合，そこには幼少時より培われてきた内なる愛の感情や体験が想起されるということである。さらには，やさしさをテーマとしての詩作自体，ゲシュタルト療法における作者の内なるやさしさ（地）を，詩作品（図）に置き換える作業と受け止めることができる。

なお，「やさしさ」をテーマとしての詩作活用エクササイズの，具体的な研究発表としては平宮（2003，2007）などがある。ちなみに平宮（2003）では，詩作活用エクササイズの実践による「エクササイズを通しての気づき」や「自己理解・他者理解」，ポジティブな「感情体験」の効果が予想された。また平宮（2007）では，「他の人たちの詩に共感することが出来ましたか」の問いに対して，全体の97％（36名中35名）の参加協力者が「十分出来た」または「少し出来た」と回答しており，このエクササイズ自体，極めて共感性を高めるのに有効なエクササイズではないかと考えられた。

さらには著者自身，この「やさしさ」をテーマとしての詩作活用エクササイズの応用として，アニミズムを背景としての詩作活用エクササイズの実践研究もおこなっている（平宮，2009b）。この詩作活用エクササイズは中学２年生を対象に，「ものにもこころ」をテーマに実践したものであるが，結果として「他者理解」「気づき」

「ポジティブな感情体験」「満足感」「感謝の気持ち」の効果が予想された。

(2) 母権的(やさしさ・温もり・いたわり・おおらかさ・感謝の気持ち)な接触

近年，学習塾に通う子ども達同様，野球，サッカーをはじめとする父権的(勝負へのこだわり，強権的な叱咤・激励など)なスポーツ少年団に通う子ども達が，小学生段階より(あるものはそれ以前の段階より)増加しているように思われる。著者が小学生だった昭和40年代では，著者自身，予想できなかったことである。なお，ここでの母権的(やさしさ・温もり・いたわり・おおらかさ・感謝の気持ち)という語は，著者自身，母性を積極的に他者との関わりの中で活用するという意味合いで用いたものである。

① 子どもにとっての遊び

ここで著者には，一つの懸念がある。その懸念とは，実存主義の哲学に裏付けられたものでもある。実存主義では，自ら意味があると思うことを行うことこそが善である。すなわちそれは，主として周りから与えられた体験ではなく，自らの体験(遊び)を通して見出していくものである。このような視点に立って考察した場合，特に勝敗や成績にこだわるスポーツ少年団のような団体に，いまだ児童期段階の子ども達を所属させること自体，子ども達が自ら感じるという行為を台無しにしているように思われるのである。言葉を換えれば，父権的なシステムによる早期よりの社会化の強要である。

これは國分(1979, p.69)の，リレーションの発達段階における母たちの介入が，子どもの仲間関係のもつ教育的意味を半減させるという指摘につながるものでもある。さらにはサティ(2000, p.118)の，以下の記述に通じるものでもある。

> そこで子どもの子どもっぽさにたえられず，子どもが早くおとなになるようにせきたてる。そのため，子どもの素朴な，構えのない，感情豊かな社会関係を放棄させてしまう。このように,「子どもらしさへの権利」を否定している親が，子どもに対してかかげる目標はおとなっぽいものとなり，また子どもにとっては，魅力のない社会関係を求められることになる。この魅力のない社会関係のために，子どもの不安や憂うつ状態がおこることすらある。

子どもは子ども同士，感じるままおおざっぱに地域の中で遊ぶのがよい。そこに大人が入ることは，子ども社会への大人の介入である。父権的な指導者が介入するスポーツ少年団には，特にその要素があると思う。さらにこの考えは，以下のサティ（2000，p.34）の記述に通じるものでもある。

> 遊びは必要である。それもただ身体と精神の能力をのばすために必要というだけでなく，母親の養育的世話がもう必要でなく，与えられなくなったときに，子どもが失った母との関係を仲間とのかかわりあいの中に取りもどすために必要なのである。

サティの述べる遊びの必要性とは，母との愛情関係を取り戻す手段としての，子ども達同士による遊びの必要性である。そこには，社会の代表者としての大人の強権的な介入はない。また，勝敗や損得勘定からくる挫折感もない。加えてサティ（2000，pp.61-64）は，子どもの社会的な愛は，挫折すると自動的にそれは不安に変わるとも述べている。その結果生じる欲求不満の出現例を，サティ自身，いくつか述べているが，その中に力の代用によって安定感を得る方法がある。いわゆる，非行である。なおこの場合の特徴としてサティは，極端な利己主義と他者に対する疑い深さ，高慢な態度，さらにはうぬぼれが強いことを指摘している。

これらの内容を，キルケゴールの視点より考察するならば，〈歴史〉や〈社会〉のほうから〈人間〉を一方的に拘束するなということである。換言すれば，〈人間〉には〈歴史〉や〈社会〉を超越した存在理由があるということでもある。ここに，子ども達一人ひとりの個性を大切にする親や教師の，哲学的背景としての，実存主義とサティ理論の有用性の一端を見出すことができる。

なお誤解を避けるために述べておくが，著者自身，単に子ども達を甘やかせと言っているわけではない。國分（1979）が述べているように，抑圧は人間的成長にとって不可欠であり，それに耐えるための自我の強さ（がまんする力）と柔軟性（複数の解決方法の行使）は，子ども達自身が今後の社会生活を営んでゆくにために必要なものである。ただ父権的なスポーツ少年団で時々見かける，指導者によるおどし的（強圧的）な言葉や行為に対して，無力な子ども達は自身の本音を抑圧し，さら

には恐怖を感じてしまう｛ちなみにサティ（2000，p.41）は，子どもの恐怖は，母に自信と落ち着きがあってはじめて安定すると述べている｝。さらには，そんな無知な指導者（モデル）の強圧的な行為を学習（模倣）し，他の周りの子ども達へと振り向けていく。最終的に，全ての子ども達が被害者となってしまうということでもある。

② 勤労の原点としてのお手伝い

終わりに著者自身，このような父権的なスポーツ少年団に代わるものとして，家庭における日々のお手伝い，学校での様々な体育や清掃活動，地域における母権的（やさしさ・温もり・いたわり・おおらかさ・感謝の気持ち）な水泳教室や文化・体育行事，さらにはキャリアガイダンスでいうところの啓発的経験などを考えている。

その中でも家庭におけるお手伝いは，家族の愛情の中で営まれるものであり，将来の勤労の原点ともなる体験である。我々大人は，今一度，お手伝いの果たす役割について再考すべきだと思う。特に現代は，女性の社会進出が進み，口唇期・肛門期に母親と接触する時間が以前よりも減少してきているように思われる。そんな時代に，子ども達を慌てて，父権的な活動に参加させる必要があるのだろうか。我々大人は，勝敗や成績に固執しない，おおらかな母権的な活動の意義を再認識すると同時に，今一度，そのことを根本から再考すべきであると思う。

（3）ふれあい（温もりのある感情交流）と自己表現活動の推進

① ハイデガーの死生観と故郷

人間は常に，様々な可能性が現われてこなければ，自由に生きているという生の感覚が得られない存在である。ところが現代社会においては，誰も死に直面しないように振る舞い，結果として自分の存在可能性をせばめるよう過ごしてしまっている（竹田，1987，pp.203-204）。どのような可能性の下，いかに生き，いかに死をむかえるべきか。そしてその問いは，教育や福祉医療など人とのかかわりの中で過ごす人々にとっても，常に直面せざるえない問いである。

それに対してハイデガーは，まず死を自覚（死を避けられないものとしての人間の存在）すると同時に死と向き合うこと，さらには死を「死への自由」として，むしろ自己の固有の可能性へとむけかえること，これだけが人間を解き放つ唯一の可能性だと述べている。さらにハイデガーは，世事を離れた暮らしの中でこそ「良心の呼び声」がやってくるとも述べている。なおここでハイデガーのいう良心とは，キリスト教における神の命令やカントの述べる自身の格律からの命令のようなものではない。素晴らしいもの，美しいもの，豊かなもの，おおよそ人間の心を魅了するものという意味での良心である（竹田，1987，pp.203-205）。

ちなみに，ハイデガーが魅了されたものの一つに詩がある。その中でもハイデガーは，ヘンダーリンの詩を手がかりとして故郷の概念を丹念に問題としている（市倉，1997，p.205）。ドイツ人にとってドイツ的なるものがそうであるように，故郷とはその人自身を育て上げた根源である。すなわち人間とはなにかではなく，人間であるとは何かに通じる答えが故郷にはある。これを「存在」に置き換えるならば，「存在」とは，存在するものではなく人として存在することであるといえる。

ここで思い出すのは，学習指導要領の道徳教育〔第５学年及び第６学年〕の内容の一つ「４．主として集団や社会とのかかわりに関すること。(7) 郷土や我が国の伝統と文化を大切にし，先人の努力を知り，郷土や国を愛する心をもつ。」（文部科学省，2009）である。 現代は科学技術の進歩，および社会の都市化傾向に伴い，故郷を離れ多くの人々が都会へ流入している。ただそんな中においてさえ我々は，一人ひとりの人の中に，それぞれの故郷が存在することを忘れてはならない。すなわち，故郷が一人ひとりの心の中に生き続けているという事実である。これは教育現場で従事する私たちにとって，他者理解および自己理解の観点からも，決して忘れてはいけない事柄のように思われる。

② 詩人にとっての詩をつくることの意味

ハイデガーがヘンダーリンの詩に注目したことを述べたが，それはある意味，自身の存在を示すものとしての詩の存在である。それでは詩とは，詩人だけのものなのか。その問いに対して市倉（1997，pp.265-269）は以下のように述べている。

> 詩人であるとは詩人の魂をもつことであろう。この魂をもつことによってのみ，人間でありうるということなのであろう。（中略）詩人であるとは，存在者の次元に埋没することなく，存在を生きることに思いをかけることであった。
>
> だから，いくら忙しく働いていても，彼は詩人でないとはいえない。彼がその忙しさの中で故国の人々とともにすごせる己れの命運に思いをいたしているのであれば。その忙しさの中に，己れを無にして永遠に面前する思いを感じとっているのであれば。

すなわち詩人であるとは，ただ単に詩をつくることではない。社会に埋没することなく，自身の周りの人々と共に，自身の存在に思いをはせ続けること。さらには自身が直面する思いと向き合い，それらを表現し続ける姿勢にあるといえるのではなかろうか。

この考えを生徒指導の観点よりとらえるならば，教師は知識の教授や校則の順守のみにとらわれることなく，児童・生徒の他者との関わり方（ソーシャルスキル，アサーティブスキル，コーピングスキルの教授など）や様々な自己表現を支援する活動を含めての生徒指導を展開する。換言するならば，人は他者とのふれあい（温もりのある感情交流）や自己表現活動があって初めて人間らしく生きられるのであり，ただ単に一人受け身的な暮らしをしているだけでは人間らしさを保てない。だから教師も，そんな児童生徒の存在をサポートする方向で教育（生徒指導）を展開しなければならないということである。

ちなみに日本生徒指導学会のホームページ（日本生徒指導学会，2009）には，八並光俊氏の生徒指導の定義「生徒指導とは，子ども一人ひとりのよさや違いを大切にしながら，子どもたちの発達に伴う学習面，心理・社会面，進路面，健康面などの悩みの解決と夢や希望の実現を目指す総合的な個別発達援助だといえます。」が紹介されているが，この定義自体，個人から社会を見る視点と社会から個人を見る視点が統合されており，まさに著者の主張するふれあいと自己表現支援を含めての生徒指導に通じるものと考えられる。

ただ実際の日本の学校現場の実情は，國分（1990a）が指摘するように，まだまだ躾け・訓育の機能が主となっているように感じられる。すなわち，社会に児童生徒を合わせようとする父権的な教育システムが主流であるように思われる。今後は押し付けでなく，子ども達自身が直に感じた夢や希望の実現のためにも，個人から社会に目を向けての開発的な生徒指導の充実が望まれるのではなかろうか。

（4）子どもの視点の尊重

サティ（2000，p.28）は，人の心の考察の仕方として，子どもが自身の家族との接触を通して得た見方と，両親が社会または文化との関係を通して得た見方の，二つの見地の必要性を述べている。ちなみに行動主義の概念の一つに，モデリングがある。モデリングとは，バンデューラが社会的学習理論の中心にすえた学習のタイプで，他者をモデルにすることによって特定の反応を学習することである（出口，2004)。なお，教育の役割の一つに社会性の育成・定着があるが，親や教師が子ども達のモデルとして日々の教育活動に従事することは，子ども達の心に道徳性（超自我）を育むという見地からも大切なことである。(子ども← 家族(両親)や教師← 社会や文化)

ただその一方で，教育の役割には子ども達の可能性を育むといった役割もある。道徳教育の内容（文部科学省，2009）に置き換えるならば「1．主として自分自身に関すること。(2) より高い目標を立て，希望と勇気をもってくじけないで努力する。」につながる教育活動である。ただここで，この目標の立て方については，十分な配慮が必要と思われる。すなわち，親や教師が直に子ども達に与えた強権的な目標が，必ずしも子ども達の目標にはなりえないということである。具体的な例をあげるとすれば，バンド活動に真剣に取り組みたいと思っている子ども達に，受験等の障害になるという理由で，その活動を停止させ，受験勉強を強要する親や教師の姿勢などがこれに相応する。これでは子ども達自身，自身の体感を尊重して，あるいは原点として生きようとする生の意欲を失ってしまう。その子の人生か，親や教師の人生か。我々大人は，人は皆，たった一度の限りある人生を歩んでいるとい

う事実を，常に忘れてはならないと思う。

親や教師は子ども達より長く生きているため，社会や文化については，一般的に子ども達以上に知っている。また体験を通して，社会に出て生きることの厳しさも知っている。そのため，大人自身の知識や体験に基づいて，子ども達の教育に携わりがちになる。それが子ども達を幸福に導くと，頑なに信じて。ただそこで忘れてはならないのが，個人から社会を見るという視点，すなわち子ども達から社会や文化を見るという視点である。言葉を換えるならば，先に述べたキルケゴールの〈人間〉のほうから〈歴史〉や〈社会〉を見るという視点である。

4．良寛における実存主義とテンダーネス・タブー

良寛は，江戸時代後期の禅僧で，修業を終え40歳近くになって郷里越後に戻り，以来74歳で死ぬまで子ども達と，あるいはひとり遊びに惚けた人物である。またテンダーネス・タブーとは，サティ理論における用語で，やさしさを表現することへの禁止令のことである。ちなみに國分久子（2008）は，國分が構成的グループ・エンカウンターに着目し，その開拓に勇気をもって臨めたのは，サティ理論があったからと思われると述べている。

なお，ここで良寛を取り上げた理由は，良寛の生きざまが極めて実存主義的であると同時に，親や教師がテンダーネス・タブーに陥らないためのヒントを，子ども達と生涯遊び続けた良寛の中に見出すことができたからである。以下に，その視点を列記する。

（1）詩や書の制作

攻撃欲のない人間はいない（國分, 1979, p.48）。攻撃欲がないように見える人は，それを昇華させた結果と思われる。良寛の逸話の中で，その身なりの悪さからか，疑われて捕えられたことが何度かある。ただその折々において，良寛は一言も弁解しなかったという（山﨑，1997，p.54）。すなわち攻撃欲を，既に何らかの形で昇

華していたものと考えられる。それはまた,キリストの自信と共感性,さらにはカッとすることのない態度（サティ，2000，pp.164-167）につながるものとも受け止められる。

禅僧である良寛が攻撃欲を昇華できた理由の一つに，日々の詩や書の制作（自己表現活動）が考えられる。良寛自身，すぐれた漢詩や和歌を詠み，たくさんの書を書いているが,それらはいずれも日本美の極致といわれる高い評価を受けている(加藤，2007)。詩や書はある意味，良寛の母への代償（國分，1979，p.74），すなわち良寛自身，詩作や書の世界を通して，母との一体感を感じ取っていたのではなかろうか。

なお実存主義の立場の人には，概念化したとたんに実体が消えてしまうという考えがあるので，面接場面を映画のように記述し，これがリレーションだと提示する人がいる（國分，1979，pp.43-44)。捕えられても一言も弁解しない迷いのなさや，詩や書での自己表現を試みたことから考察して，当時の良寛が極めて実存主義的な生き方をしていたものと推察される。それはまた，良寛が「書家の書，歌よみの歌，料理人の料理」を嫌った（山﨑，1997，p. 3）という，役割にとらわれない生きざまからも推察されることである。

(2) 理論よりも実践を重んじる

理論よりも実践を重んじるとは，良寛の師である国仙和尚の教えである。良寛自身，それに従い実践を心がけたようである（中園，1994，p.50)。

これは教育現場で従事する教職員にとっても参考になることである。すなわちやさしい気持ちは持っているが,それを伝えきれないようでは,やさしさは周りの人々に伝わらない。特に人口移動が激しく，以前のように以心伝心で思いを伝えにくくなった現代社会では,なおさらのことであろう。実践を伴った中で,良寛は愛を人々に伝えようとした。これもある意味，知的な理解よりも体感を重視する実存主義に通じる事項と受け止められる。

（3）「愛語」への関心

「愛語」とは道元禅師の『正法眼蔵』の中にあって，良寛が大変尊重したといわれている言葉である。中園（1994，pp.80-81）より，テンダーネス・タブーを踏まえつつ，以下に一部を抜粋してみた。

> 「愛語」ということは，人々に接した時に先ず慈愛の心を起こし，相手の心になって慈悲の言をかけることである。一切の暴言・悪言を吐いてはならない。（中略）また人々に接する時には赤子に接するような慈悲，愛撫の心を以て言葉を交わすことが「愛語」の行いである。人の徳あることは大いにほめたたえるべきである。徳のない人は気の毒な人として哀れんでやることである。（中略）知るべきである。愛語は必ず愛の心からおこるものであることを。愛の心は慈悲の心を種子としている。愛語は天をひっくりかえす超越的な力であることを学ぶべきである。愛語は相手の長所を絶賛する以上の功徳があるのである。

テンダーネス・タブーは，サティ（2000）の「愛の関係」論より，導き出された概念である。具体的な例としては，男の子が遊び仲間に「赤ちゃんみたい」とか「女みたい」などと言われるのがいやで，権力や腕力を身に付けることが理想となってくる。やがては，どの強盗も愛すべき人間，どの詐欺師も理想的な人間に見えてくるといったもので，そこには愛への迷いやためらいがある。愛を求め，その挫折が生み出す世界とも受け止められるが，ただそこでも，愛への希求がある。力による愛の強奪的傾向がある。

以上，3つの視点より良寛について解説してみた。國分（2004）は，哲学を仕事や生活に具現化した人物を模倣することを，自らの思想・哲学を培う方法の一つとしてあげているが，著者自身，教育現場に立つ多くの人々に，是非とも一度は良寛にふれていただきたいと思っている。ちなみに良寛は，最も日本人らしい日本人のひとりであるとも言われている（中園，1994，p.3）。さらに著者自身が以前，良寛の詩歌，及び弟子が書いた逸話のいくつかを，小学校学習指導要領・第3章道徳・第2内容〔第5学年及び第6学年〕より考察してみた結果，「4（8）外国の人々や文化を大切にする心をもち，日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努め

る。」以外のすべての内容が，良寛の詩歌，及び弟子が書いた逸話を用いて伝達可能であった（平宮，2009a）。すなわち良寛の生きざまは，時代を超え現代の教育においても活用可能であった。

また沢崎（1985）は，つながりをつくる教師の模範例として，良寛を「子どもらと手まりつきつつこの里に　遊ぶ春日は暮れずともよし」の作品を紹介しつつ記載している。ただ文中，退行の得意な人物の例として良寛を取り上げているが，著者としては自我の柔軟な人物，あるいは慈愛の精神に満ちた人物として良寛を受け止めている。なぜなら退行とは，防衛機制のひとつであり，良寛が子ども達との遊びに没頭したのは，自身の自我を防衛するというよりもむしろ，子ども達とふれあい（温もりのある感情交流）たいとする，先の教師の取り組みや関わり方に通じる姿勢ではなかったかと想像されるからである。

5．愛のある教育を目指して

カウンセリングの理論より初め，実存主義的に生き，さらにはテンダーネス・タブーに陥らなかった人物としての良寛を紹介した。

なお結論として著者が言いたいのは，〈人間〉から〈歴史〉や〈社会〉を見る視点のみを尊重しろと主張しているわけではない。著者自身，〈歴史〉や〈社会〉のほうから〈人間〉を見つめることも大切であると考えている。またそうでなければ，家庭や学級が子ども達に乗っ取られてしまうような事態（家庭崩壊，学級崩壊など）や，平気で他者の心を踏みにじるような事態（いじめ，非行など）も時には生じてしまう。それはある意味，子ども達の中に，役割取得能力や共感性（坂本，2004）が十分に育まれてないからとも受け止められる。いわゆる，子どもは自己中心的である。身体の小さいうちの自己中心性はまだ対応できるが，身体が大きくなると大変である（著者自身の，教師やスクールカウンセラーとしての経験からもそう思う。ただそれでも母は，やさしくおおらかだとも思う。）。思春期を迎えた子ども達への，対応の難しさの理由の一つがここにある。そして我々大人は，そうした観点を忘れ

てはいけないとも思う。

さらに〈歴史〉や〈社会〉のほうから〈人間〉を見つめる視点については，サティ(2000，p.149)の述べる以下の記述に通じるものでもある。

> 一番必要なのは適応の二重過程である。すなわち個人が社会に適応し社会が個人の欲求に適応するということである。理想的文化あるいは理想的社会機構を次のように定義できないことはない。すなわち理想的文化あるいは理想的社会機構とは表現の自由を社会的に最大限にみとめ，人間性の成長を最大限にゆるすものでなくてはならない。しかも，もし代償作用と抑制が必要ならばそれを最も有効たらしめるような文化であり社会機構でなくてはならない。

以上，個人が社会に適応していくことも必要である。ただ問題は，その程度のことである。すなわち，現在社会の近代化の流れは，一人ひとりの子ども達の人間性，さらにはその魂の叫びに，「十分耳を傾けているか」ということである。愛の欠乏，特に，金持ちや著名になることが最善であるかのような一部社会的風潮，テレビやインターネットに代表される一方的な情報提供，幼少期に母親と接する（ふれあう）時間の減少，少子化や習い事に通う児童生徒の増加に伴う遊び仲間の減少，受験の低年齢化，社会の近代化に伴う人びとの役割の明確化，勝ち組・負け組に代表される社会の二元化傾向などは，その流れに拍車をかけているように思われる。そしてこのような社会の中では，寅さん（映画「男はつらいよ」）やハマちゃん（映画「釣りバカ日誌」），両さん（漫画「こちら葛飾区亀有公園前派出所」）など，社会の役割から抜け出した破天荒なキャラクターや，ヨン様（韓国ドラマ「冬のソナタ」）のような母権的なキャラクラーに注目が集まるのもうなずける。それはある意味，愛に乏しい今の社会を変えてほしいと願う，多くの人々の心の叫びの置き換えではなかろうか。

人間は何のために生れ，そして死を受け入れていくのか。我々大人は，今一度，人間の生きる意味を考えなおしてみる必要があると思う。そしてその上で，テンダーネス・タブーに陥ることなく，愛をもって日々の教育活動（家庭教育・社会教育・

学校教育）に携わるべきであるとも考える。

6．著者の考える愛

終わりに，現時点での著者の考える愛について，簡潔に記載する。それは愛のとらえ方が，人それぞれ異なると思うからである。

著者の思い描く愛とは母権的（やさしさ・温もり・いたわり・おおらかさ・感謝の気持ち）なものである。他者に対する思いやりの情に満ち，かつ積極的・行動的なものである。決して一部の支配層の下，大勢の人々がひざまずくというものではない。作品を通して紹介すれば，金子みすゞ作「花屋の爺さん」（金子，1984）に描かれた，自分の育てたお花の幸せを祈る爺さんの姿や，金子みすゞ作「夢賣り」（金子，1984）に描かれた，夢の買えないうら町のさみしい子等のところにも，だまって夢をおいていく夢賣りの姿に通じるものである。また，いわさきちひろの描く，子ども達のほのぼのとした姿に通じるものである。さらに著者自作の詩集『すくーるにっき』（平宮，2001）に流れる，穏やかな教師の姿勢に通じるものである。

そしてそれは又，自身の関わった親子の幸せを祈るものでもある。決して目立つことはないが，旅立った後までもその親子の幸せを終生願うものである。むやみに心のつながりを切ったり，暴走したりするようなものではない。逆にその暴走を否めたり，なだめたりすることはある。

なお，フェレンツィは「愛が癒す」（國分，1990b）と主張しているが，その主張を考慮するならば，美ししハーモニー，あるいはハイデガーの指摘する母なる故郷（例：寅さんにとっての葛飾区柴又，良寛さんにとって越後の国，著者自身にとっての故郷黒部）や懐かしき田舎の風景（例：映画「おもいでぽろぽろ」）なども，ある種の愛である。すなわち愛とは，人々の心に安心と喜びを与えるものである（例：夫の愛を感じた妻が，落ち着きを取り戻す）。また，人々の成長や幸福の，手助けをするものでもある（例：教師の愛が，児童生徒のやる気を引き出す）。

また，著者の考える愛とは，戦争のなかった縄文時代（松木，2002）に思いをは

せるものでもある。

具体的には，様々な生（人も動物も，花も虫も，山も川も，野菜も石ころも）にも命があるとしたアニミズム（例:映画「千と千尋の神隠し」）や，縄文人が育んだ「円の発想」（すべてのものを平等に扱い，誰もが対等な関係で生活を営もうとした。）（武光，2003）を念頭においてのものである（平宮，2008）。{争いは，フィクション（文学・映画・演劇など）の世界，スポーツ競技などのルールの設定された場面，あるいは正式な法律の世界のことだけでよい。仮に巻き込まれたとしても，生命あるいは生きる意味に結びつかない争いは，極力避けたほうがよいとも思う。いわゆる，予防が大切である。}

そして著者自身，そんな自身の愛を伝えることで，少しでも母権的（やさしさ・温もり・いたわり・おおらかさ・感謝の気持ち）な態度や行為が，人々の間にわき上がることを願っている。

ここで参考として，他の愛の定義を紹介するならば，國分・駒込（1990）は，一瞬も休まず光と熱を放ち続け，対象を照らし暖める太陽を例に，フェレンツィの「愛が癒す」という主張と，母に抱かれて授乳されている子どもと母との感情体験が，愛の起源であるとしたサティ理論を交えて愛を定義している。なお，この定義と著者の考える愛の共通点は，以下の通りだと思う。

① 母権的だという点

② 愛には人々を幸福に導く力があるという点

③ 性（sex）へのとらわれが低い点

逆に相違点は，著者のほうが特に，以下のことに注目した点だと思う。

① 日本の女流文化（金子みすゞ，いわさきちひろなど）

② 縄文思潮（アニミズム，「円の発想」）

③ 懐かしき故郷（短絡的なものでなく継続的なもの）

なお著者自身の性（sex）のとらえ方は，性も愛も一人の人間（一つのゲシュタルト）の中からわき上がってくる以上，完全に分離して扱うことはできないものと考える。ただ性が愛に及ぼす影響は，極めて低いものとも考える。それは多くの母

親がわが子に向ける愛は，性に向けられるというよりもむしろ，その子の存在（生命）そのものに向けられているように感じられるからである。

また愛とは，懐かしき故郷や，親が生涯わが子の幸せを望み続けるように継続的（永続的）なものとも考える。決してその場その時の雰囲気や，諸事情により左右されるような短絡的（短期的）なものではない。生涯にわたり，我々一人一人に，生きる力や心のゆとり，困難に立ち向かう勇気を授けてくれるようなものである。

さらに著者の考える愛とは，勝ち負けや白黒，あるいは自身の身分にこだわるような自己顕示欲の強いものでもない。勝ち負けや白黒，身分へのこだわりは父権的な社会でのことである。著者の考える愛とは，お互いが相互に許しあえるようなおおらか（自我の柔軟性）な母権的社会において，宗教・文化・思想・哲学・職業（役割）・年齢・性別さらには前歴や習慣などの異なる見ず知らずの人々に対しても，やさしく温もりのある手のひらを差し伸べ，そして過去・現在の労苦をいたわるような，穏やかな性質を有するものである。視点を換えれば，様々な人々や様々なものに対しても感謝の念（石原，2007）を抱けるような，太古のアミニズムの思潮につながるような存在で，平和で平穏なものである（菅原，2009)。

以上，著者自身の考える愛を述べてきた。これからも，人類が愛の持つ力（可能性）を尊重し，未来の子ども達に幸福な世界を提供し続けていって欲しいと願う。

（付記）

論文を読んでいただき，感謝します。ありがとうございました。

（引用・参考文献）

出口毅 (2004). 学習のメカニズム　桜井茂男 (編)『楽しく学べる最新教育心理学』　図書文化　pp.61-76.

平宮正志 (2003). 高校生を対象とする構成的グループ・エンカウンターへの詩作の活用　日本カウンセリング学会第 36 回大会発表論文集，94.

平宮正志 (2005). 読書療法の目的と実施上の留意点に関する一考察　－ poetry therapy を含めてー　読書科学，49(1)，33-39.

平宮正志 (2007). 大学生を対象とした詩作活用エクササイズの有効性を探る研究　日本読書学会第 51 回研究大会

発表資料集，52-57.
平宮正志 (2008). 教育カウンセリング場面における循環　二松學舍大学論集　51，47-60.
平宮正志 (2009a). 良寛を通しての道徳教育　―学習指導要領の改訂告示をふまえて－　二松學舍大学論集，52，15-35.
平宮正志 (2009b). 中学２年生を対象とした詩作活用エクササイズの実践研究　－アニミズムを背景として―　文教大学生活科学研究，31，129-137.
平宮夢太郎 (2001). すくーるにっき　文芸社
市倉宏祐 (1997). ハイデガーとサルトルと詩人たち　NHK ブックス
石原結實 (2007). 老化は体の乾燥が原因だった！　三笠書房　p.200.
石﨑一記 (2004). 発達を促す　桜井茂男 (編)『楽しく学べる最新教育心理学』　図書文化　pp.23-39.
金子みすゞ (1984). 美しい町 新装版金子みすゞ全集・Ⅰ　JULA 出版局　p.116. p.174.
加藤僖一 (2007). ほっとする良寛さんの般若心経　二玄社　p.16.
國分久子 (2008). サティ　國分康孝 (監修)『カウンセリング心理学事典』　誠信書房　p.501.
國分康孝 (1979). 心とこころのふれあうとき　黎明書房
國分康孝 (1980). カウンセリングの理論　誠信書房
國分康孝 (1990a). ガイダンス　國分康孝 (監修)『カウンセリング辞典』　誠信書房　p.73.
國分康孝 (1990b). フェレンツィ　國分康孝 (監修)『カウンセリング辞典』　誠信書房　p.633.
國分康孝 (2004). 哲学概論　NPO 日本教育カウンセラー協会 (編)『教育カウンセラー標準テキスト上級編』　図書文化　pp.8-18.
國分康孝・駒込勝利 (1990). 愛　國分康孝 (監修)『カウンセリング辞典』　誠信書房　p.1.
松木武彦 (2002). 弥生への旅立ち 争いのはじまり　ＮＨＫスペシャル「日本人」プロジェク (編)『日本人はるかな旅⑤ そして“日本人”が生まれた』　ＮＨＫ出版　pp.154-169.
文部科学省 (2009). 新学習指導要領　第３章道徳　第２内容　〔第５学年及び第６学年〕
〈http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/dou.htm〉 (2009 年 12 月 18 日)
中園正身 (1994). 幼形成熟の人　良寛―生き方の心理学研究ノート―　宣協社
日本生徒指導学会 (2009). 生徒指導とは
〈http://www18.ocn.ne.jp/~jagc/JAGC.html〉 (2009 年 12 月 18 日)
貫成人 (2007). ハイデガー　青灯社
小野瀬雅人 (2004). 教育評価を指導に生かす　桜井茂男 (編)『楽しく学べる最新教育心理学』　図書文化　pp.97-118.
大川一郎 (2004). 知的能力を考える　桜井茂男 (編)『楽しく学べる最新教育心理学』　図書文化　pp.119-136.
坂本真士 (2004). 社会性を育む　桜井茂男 (編)『楽しく学べる最新教育心理学』　図書文化　pp.153-172.
沢崎達夫 (1985). つながりをつくる先生　真仁田昭 (編著)『つながりを求める子どもたち』　図書文化社　pp.173-236.
菅原キク (2009). マヨイ屋の店番 トキワ④　講談社
Suttie, Ian D. (1935). The Origin of Love and Hate. London: Penguin Books.
(サティ，I.D. 國分康孝・國分久子・細井八重子・吉田博子 (訳) (2000). 心理学選書①愛憎の起源　黎明書房)
正保春彦 (1990). 世界内存在　國分康孝 (監修)『カウンセリング辞典』　誠信書房　p.334.
竹田青嗣 (1987). 現代思想の冒険　毎日新聞社
武光誠 (2003). 日本人なら知っておきたい神道　ＫＡＷＡＤＡ夢新書　pp.86-87
山﨑昇 (1997). 良寛　清水書院